

## 第43回日本泌尿器科学会中部総会

### シンポジウム

#### 進行尿路性器癌の治療の諸問題

#### —転移巣の治療を中心に—

—司会にあたって—

奈良県立医科大学泌尿器科学教室（主任：岡島英五郎 教授）

岡 島 英 五 郎

大阪府立成人病センター泌尿器科（部長：古武敏彦）

古 武 敏 彦

#### MANAGEMENT OF ADVANCED UROGENITAL CANCER : TREATMENT OF METASTASIS

Eigoro Okajima

*From the Department of Urology, Nara Medical University*

Toshihiko Kotake

*From the Department of Urology, the Center for Adult Diseases, Osaka*

In clinical trials in advanced urogenital cancer with metastasis there are cases showing a poor clinical response and poor prognosis. The cure of advanced urogenital cancer still remains a major problem in management.

The present paper is a summary of 8 articles presented at the symposium on "Management of advanced urogenital cancer: Treatment of metastasis" in the 43th Annual Meeting of Center Section of Japanese Urological Association in November, 1993. The present status, problems and future conception of treatment modalities for advanced urogenital cancer were discussed.

(Acta Urol. Jpn. 40: 905-907, 1994)

**Key words:** Advanced urogenital cancer, Metastasis, Treatment

尿路性器癌の治療においても、早期に発見し、早期に根治的治療を行うことが原則である。そこで、尿路性器癌の現状をみると、近年における画像診断の進歩にともない、人間ドックや他臓器疾患の検索中に偶然に発見される腎細胞癌症例が増加した。また、人間ドックの普及や他科領域の医師の協力により、血尿を呈する患者の精査を泌尿器科医が依頼される機会が増加した。さらに、泌尿器科領域においても、全国各地で前立腺の集団検診の実施が推進されている。これらの結果、尿路性器における早期癌発見率の向上が認められるようになってきた。

しかし、一方では転移を有するような進行癌症例が根絶されるには至っておらず、転移巣に対する治療法についてしばしば苦慮するのも事実である。また、原

発巣に対する根治的治療が終了した後、経過観察中に局所再発や遠隔転移が出現する症例もあり、このように進行癌症例との遭遇は枚挙に遑がない。

進行尿路性器癌の治療、ことに転移巣の治療としては、手術療法、化学療法、放射線療法、免疫療法および温熱療法などが挙げられるが、各臓器別、転移巣別にそれぞれの単独療法あるいは併用療法が施行されている。また、化学療法においては cytotoxic drug による多剤併用療法が積極的に導入され治療成績の向上も図られている。さらに、これらの種々の治療方法を駆使した集学的療法による治療成績が追究されており、その結果、ある程度の近接効果がえられ、延命効果につながっている症例もあるものの、一方では集学的療法を行ったにもかかわらず、期待した効果がえら

れないことはよく知られた事実である。

集学的療法の概念が泌尿器科領域に導入されておよそ15年が経過するが、転移巣に対する治療成績の向上は、現在もおおわれわれ泌尿器科医に課せられた難題の1つであろう。このような現況に鑑みて、第43回日本泌尿器科学会中部総会会長の守殿教授が、非常に時期をえた本シンポジウムを企画され、われわれが司会の大役をお引き受けすることになった次第である。

本シンポジウムにおいては、尿路性器癌の転移の特徴を理解し、癌細胞と周囲組織の関連からみた転移の機構ならびに転移巣に対する現在の治療成績をもとに、その治療効果を規定する諸因子を検討した。すなわち、尿路性器癌の転移巣の治療の現況を解析し、各臓器毎に治療の適応と限界について明らかにするとともに、将来的な治療対策の開発と展望について討議した。これらのテーマについて、それぞれ精力的に研究され、第一線で活躍中の8人のシンポジストより研究成果を発表していただいた。以下の8編の論文は当日の講演をもとに各シンポジストによってまとめられたものである。

まず、郷司和男先生には、基礎的研究として、ヒト腎細胞癌の転移機序の解明と転移予防治療法の開発を目的に、ヌードマウスにおける腎細胞癌転移モデルを作成し、宿主線維芽細胞が腎癌細胞の type IV collagenase 産生能におよぼす影響について発表していただいた。転移を有する進行癌に対する治療法の開発のためには、有用な動物モデルの開発と転移機構を十分に理解する必要がある。その意味からも、この発表は本シンポジウムを行うにあたっての基礎的な話題提供であり、ついで臨床的に各臓器毎の治療成績についての討議がなされた。

そこで、進行腎細胞癌、とくに転移巣を有する症例の治療成績につき木内利明先生から発表していただいた。すなわち、大阪府立成人病センターにおける279例の腎細胞癌のうち、M1 症例64例と M0-M1 症例55例につき、その解析結果が示された。一側性の肺転移症例など、かぎられた症例については外科療法にて予後の改善がえられたが、術後の有効な補助療法の開発が望まれるとの結論であった。

ついで、寛 善行先生より腎細胞癌には無効とされている化学療法が、MDR 克服薬を併用することにより効果がえられるとの発表をいただいた。すなわち、MDR 克服薬の感受性増強効果の基礎的研究をもとにして、骨や対側腎への転移巣を対象とした MDR 克服薬併用の動注化学療法の臨床応用にて、従来の化学療法に比較して有効な治療成績が示された。今後、

BRM 療法に抵抗性を示す転移巣に対して、期待される治療法であろう。

尿路移行上皮癌の転移巣に対する治療成績については、まず大園誠一郎先生より奈良医大および関連施設における治療結果をもとに、進行尿路上皮癌の治療の現況と問題点を示していただいた。尿路上皮癌の転移巣の治療は化学療法が中心であり、近接効果において CR をえることが唯一、延命効果につながることを示された。また、転移を予防するためには原発巣治療に際しての adjuvant 療法の必要性が強調された。

ついで、小幡浩司先生からは尿路移行上皮癌に対する M-VAC 療法について、rGCSF 併用群と非併用群に分けた詳細な解析結果の発表があった。すなわち、rGCSF 併用群の有効率が非併用群に比較して有意に高く、延命効果も認められ、rGCSF は relative dose intensity (RDI) を高める結果が示された。しかし、RDI と臨床効果の間には相関はみられず、また escalated M-VAC では有効例が多いとする報告が少なく、今後さらに効果的な regimen の開発が望まれよう。

続いて進行前立腺癌に対する治療については岡田謙一郎先生より発表していただいた。化学療法剤として suramin の有効性につき示されたが、今後の臨床応用には副作用の対策が問題となるであろう。また、骨転移に対して QOL の改善のために放射線療法および外科療法の有用性についても述べられた。さらに、bisphosphonate の骨転移に対する有効性を示す基礎的なならびに臨床的データを示された。前立腺癌の転移巣についても、現時点では根治的治療は困難であり、今後の検討が待たれるところである。

最後に進行精巣腫瘍の治療について、まず salvage surgery の役割を三木恒治先生より発表していただいた。すなわち、化学療法後に salvage surgery を27例に施行し、組織学的に壊死、奇形腫、残存癌がそれぞれ12例(44%)、5例(19%)、10例(37%)にみられ、残存癌例の再発率は高く、5年生存率は有意に低い結果であった。また、術前血中腫瘍マーカーの陰性化が salvage surgery の必須条件であり、施行にあたっては安易な手術適応を避け、十分な術前化学療法などを行い、残存病巣を壊死、奇形腫に導くようにするとともに、残存癌例に対しては十分な術後化学療法が必要であることを強調された。

ついで進行精巣腫瘍に対する後腹膜リンパ節郭清術につき高崎 登先生より発表していただいた。大阪医大での後腹膜リンパ節郭清術施行症例の解析と文献的考察により、非セミノーマ stage IIA に対しては、

腫瘍細胞の播種防止の観点から化学療法を郭清術に先行して行う方が良いと結論された。また、非セミノーマ例では CR 例についても郭清術を行う必要があり、一方、セミノーマ例では縮小率が80%以上えられれば、郭清術の必要性はないとの結果を示された。

以上がシンポジウムでの各講演の概要であるが、これらの論文より、進行尿路性器癌、ことに転移巣に対する治療の現況と問題点、さらには新しい治療法の一端が示されたと考えられる。しかし、これらの報告はいまだ研究途上にあるものが多く、また今後の臨床応

用の普及が期待される治療も含まれることから、多くの解決されるべき難問が山積している。今後の会員の先生方の弛まない研究努力から、さらに有効な治療法の開発がなされ、完全治癒をめざした治療法が確立されることを切望するしだいである。

最後に、守殿先生にはこの機会を与えていただきましたことにあらためて厚く御礼申し上げます。

(Received on June 1, 1994)  
(Accepted on June 7, 1994)

(迅速掲載)